



3月に入り、「暖かい」と感じる日が何日か続きました。そうかと思えば、急に冷え込んで雪が降ることもありましたが、それでも以前ほど冷え込みません。夏時間に移行して日が長くなったことも手伝って、徐々にではありますが春の訪れを感じます。

先般、一通の手紙が届きました。US Census of Bureau (統計局) からで、Census 2010、いわゆる国勢調査の案内でした。1週間ほどで調査票が届くので調査の協力をお願いします、というものです。国勢調査は、日本では5年に一度ですがアメリカでは10年に一度です。赴任期間中にその年にあたるのはある意味ラッキーに思います。

その案内状ですが、英語のほかに、スペイン語、中国語、韓国語等の外国語で、ホームページには調査票の記入に役に立つ情報があるので調査票が届いたら見てほしい、旨の記載がありました。残念ながら、そこには日本語は無かったのですが、統計局のホームページには、日本語を含む世界各国の言葉で回答票の記入方法について、詳細に案内が掲載されていました。間違いの無いようにと、早速日本語の案内をプリントアウトしました。そのホームページには実に多くの言語での案内が掲載されており、その数は約60にも及んでいます。中には見たことのないような形の文字での言葉もあり、また、私のパソコンでは表示されないフォントの言葉もありました。(ご関心がありましたら 2010census.com をご参照ください)

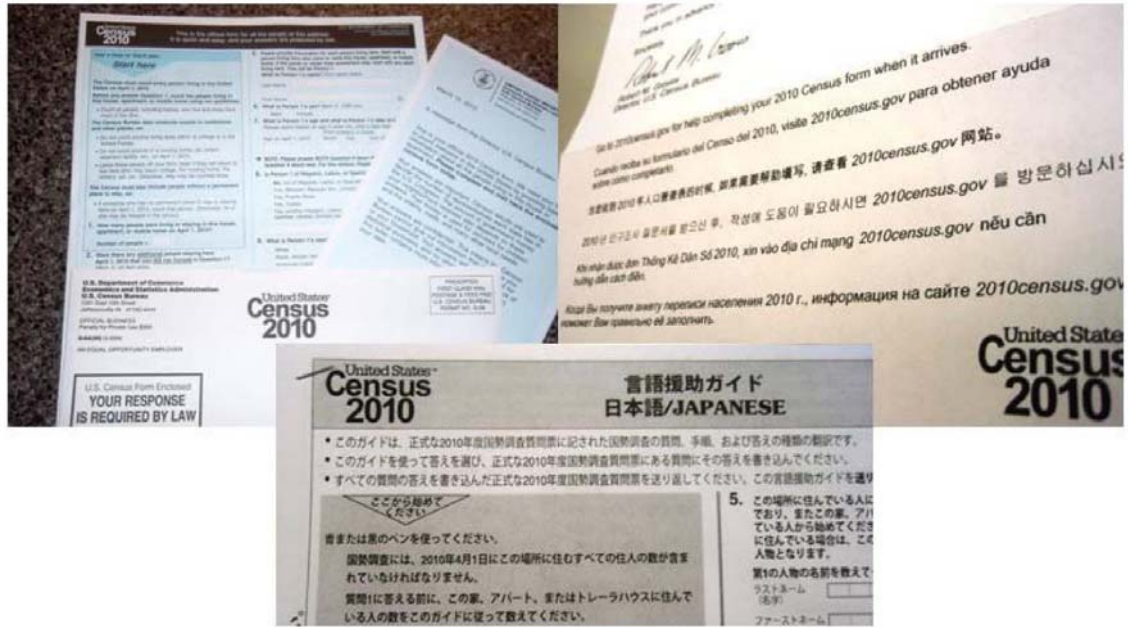
その後1週間ほどたち、調査票が送られてきました。内容は非常に簡潔で、・家に何人住んでいるのか、・持ち家か借家か、・居住者全員についての氏名、性別、生年月日及び人種について回答をすればよいだけで、あっという間に記入が終わりました。ただ、特徴的なのは人種の欄です。日本の国勢調査では国籍が日本か日本以外かを問う欄があるのみですが、今回送られてきた調査票では、白人、黒人、アフリカ系アメリカ人、インド人、中国人、等々多くの選択肢が用意されており、また、選択肢に当てはまらない場合には、具体的に記入する必要があります(この選択肢の中には日本人はありました)。また、人種に関連する問いで、ヒスパニック系であるか否かという問いもありました。これは、近年アメリカにおいてヒスパニック系が黒人を抜いて最大の少数民族となったといった人口動静を表した問いです。上記の60カ国語が用意されていることも含めて、まさに移民の国アメリカならではの感じた次第です。

調査に回答することは法律で義務付けられている一方で、その回収率を高めるために様々な工夫がされています。テレビCMはもちろんですが、街中のあちこちにCensus2010の宣伝があります。先般、地下鉄に乗った際には、車両広告の全てがCensus2010のもので、Censusが如何に重要か、調査の結果によりどこにインフラ整備(病院、職業訓練センター、学校、橋など)が必要かわかり、そのために毎年4,000億ドルの予算が使われる、と回答することにより住民にメリットがあるということを強調していました。

以前もご紹介いたしましたが、現在5歳になる私の息子は、当地で公立の小学校に通っていますが、その学校には日本語と英語と両方の言語の習得を目指すクラスがあります。私が住んでいる地区は日本人が多いからこそ、教育インフラとしてこのような学校/クラスがあるということかと思えます。他方で、昨今の不景気も手伝って、多くの企業で日本人駐在員を減らす方向にあるというお話も伺います。その表れの一つということも言えると思いますが、ここ数

年で多くの日本食レストランが閉店したそうです。上記のように、日本語よりも中国語、韓国語での案内を掲載していることもあり、将来的には、息子が通っている小学校はそのあり方を変えてしまうかもしれません。

写真は、左は送られてきた Census2010 の調査票、右はその事前に送られてきた案内状、下はホームページからダウンロードした日本語の記入ガイドです。



ジェトロ・シカゴ・センター
産業機械部 松本 崇